



濱田達二先生を偲んで

佐々木康人

RI 利用と放射線防護管理に多大の貢献をされた濱田達二先生が去る 2 月 21 日に肺炎のため鬼籍に入られました。享年 91 歳でした。ご逝去の報に接し、改めて先生の温顔が目に見え、寂しさがひとしおです。ご遺族のご悲嘆を思い、心からお悔やみ申し上げます。

濱田先生は第二次世界大戦直後の昭和 20 年 9 月に東京帝国大学理学部化学科を卒業されました。幼児期から「子供の化学」を愛読され、将来は化学の道に進もうと決めておられたとのこと。昭和 21 年に(財)理化学研究所の仁科研究所助手に就任されました。最初に勤務されたのが、現 日本アイソトープ協会第一会議室の場所であったそうです。敗戦の混乱期にあって、化学者として RI 利用研究に従事されました。仁科芳雄博士が建設された 2 台のサイクロトロンは原爆製造装置と誤認され、占領軍の手で東京湾に廃棄されましたが、昭和 27 年にサイクロトロンが再建されました。濱田先生はいち早く RI 製造とその医学、農学への応用研究で多くの業績を上げられました。昭和 29 年 3 月ビキニ岩礁での核爆発実験で、死の灰を浴びた第五福竜丸事故に遭遇され、これを契機に標準資料の作成を通じて放射線環境科学の分野に貢献されました。また、 ^{14}C を用いた年代測定の開発研究を手掛け、考古学の発展に寄与さ

れました。

昭和 30 年代に RI 利用が盛んになる中で、濱田先生は放射線障害防止法令の制定に技術的視点から協力されました。その後、放射線審議会委員、原子力安全委員会専門委員として放射線防護・管理体制の整備と法令・指針策定に従事されました。「これまで一番手がけてきたのは放射線防護の仕事だろうと思っています。」と先生は述懐しておられます(私の RI 歴史「RI 利用の黎明期に行きあわせて」本誌 2007 年 9 月号)。

理化学研究所主任研究員を経て昭和 57 年に日本アイソトープ協会常務理事に就任され、輸入 RI の使用者への配分、施設安全、輸送安全、廃棄物集荷処理などを推進されました。協会常務理事ご退任後も協会顧問、テクニカルアドバイザーとして、最近まで協会業務の推進に尽力されました。同時に仁科記念財団理事、原子力安全研究協会常任理事なども務められました。

日本アイソトープ協会の国際放射線防護委員会(ICRP)刊行物翻訳事業は濱田先生を中心に自発的な活動として始まり、今日では重要な業務の 1 つになっています。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災、巨大津波に続く福島第一原子力発電所の事故後は ICRP 勧告への関心が高まり、翻訳事業の重要性が再認識されています。終始中心的役割を果たしてこられた濱田先生は、この事業の継続が確信できないと協会を去ることができないと、常務理事を務めていた筆者を促されました。翻訳検討委員会を刷新し、翻訳事業の在り方を見直し、継続性のある事業体制を作ることをお約束して、努力してきました。先生に「もう大丈夫」と言っていたく機会を得ずに、永久のお別れをしたことは誠に残念でなりません。先生に満足していただけるように、良質で安定した翻訳事業に育てるために関係者が力を合わせて努力する決意です。

濱田先生、安らかにお休みください。ご冥福をお祈り申し上げます。

(湘南鎌倉総合病院附属臨床研究センター)